

マタイの福音書 20 章 1～16 節をお開き下さい。イエス・キリストのたとえ話であります。早速初めに通して読ませて頂きます。目で追ってみて下さい。『<sup>1</sup>天の御国は、自分のぶどう園で働く労務者を雇いに朝早く出かけた主人のようなものです。<sup>2</sup>彼は、労務者たちと一日一デナリの約束ができると、彼らをぶどう園にやった。(一デナリというのは今から 2000 年前の、日本で言えば弥生時代ですが、その時代の一日の労働者の平均賃金というものです。日雇い労働者の平均賃金が大体一日一デナリ、そういう感覚を持って下さい。)<sup>3</sup>それから、九時ごろに出かけてみると、別の人たちが市場に立っており、何もしないでいた。<sup>4</sup>そこで、彼はその人たちに言った。『あなたがたも、ぶどう園に行きなさい。相当のものを上げるから。』<sup>5</sup>彼らは出て行った。それからまた、十二時ごろと三時ごろに出かけて行って、同じようにした。<sup>6</sup>また、五時ごろ出かけてみると、別の人たちが立っていたので、彼らに言った。『なぜ、一日中仕事もしないでここにいるのですか。』<sup>7</sup>彼らは言った。『だれも雇ってくれないからです。』彼は言った。『あなたがたも、ぶどう園に行きなさい。』<sup>8</sup>こうして、夕方になったので、ぶどう園の主人は、監督に言った。『労務者たちを呼んで、最後に来た者たちから順に、最初に来た者たちにまで、賃金を払ってやりなさい。』<sup>9</sup>そこで、五時ごろに雇われた者たちが来て、それぞれ一デナリずつもらった。<sup>10</sup>最初の者たちがもらいに来て、もっと多くもらえるだろうと思ったが、彼らもやはりひとり一デナリずつであった。<sup>11</sup>そこで、彼らはそれを受け取ると、主人に文句をつけて、<sup>12</sup>言った。『この最後の連中は一時間しか働かなかったのに、あなたは私たちと同じにしました。私たちは一日中、労苦と焼けるような暑さを辛抱したのです。』<sup>13</sup>しかし、彼はそのひとりに答えて言った。『友よ。私はあなたに何も不当なことはしていない。あなたは私と一デナリの約束をしたではありませんか。<sup>14</sup>自分の分を取って帰りなさい。ただ私としては、この最後の人にも、あなたと同じだけ上げたいのです。<sup>15</sup>自分のものを自分の思うようにしてはいけないという法がありますか。それとも、私が気前がいいので、あなたの目にはねたましく思われるのですか。』<sup>16</sup>このように、あとの者が先になり、先の者があとになるものです。』』

このたとえ話を一読して皆さんはどのような思いを抱かれたでしょうか。どのような印象を受けられたでしょうか。もし「それは不公平だ。フェアじゃない。このような話は到底理解できない、理解に苦しむ、不可解である、まったく不可思議である。」そのように感じた人がいるならば、その人は結論から言いますと律法主義者であります。そう思った人は皆、律法主義者です。自分が頑張れば何でも出来ると思っている傲慢な不遜な人たちであります。でもその一方で、もしこのストーリーを読んで「ああ、有り難いな。これは私だ。」と思った方がいるならば、その方は神の恵みというものを本当に理解している人であります。ちょうど 20 章 1 節のところ、冒頭に「天の御国」という言葉があります。これが重要なキーワードになります。「天の御国」ということは、地上の国ではないということです。私たちの価値観、考え方とは全く違うものである。逆さまの国であると思って下さい。そしてここに出てくる主人というのが神様のことです。この神は私たちが思うような神ではないかも知れません。むしろこの世の感覚で言うならば、全く逆説的な、パロックス的なお方ということです。神様が当然だと思われることと、私たちが当然だと思うことは、全く違うということを教えられます。掛け離れています。神様が「これが当然だ。」と言うことと、私たちが「これが当然だ。」言うところには、大きなギャップがあります。このストーリーを読めば私たちの中には、ありえないと思う人もいますが、有り難いと思う人もいます。労働者のそれぞれの勤務時間、労働時間は異なります。最後に滑り込むようにして雇われた人、5 時に雇われた「5 時から男」はたった 1 時間しか働かなかったわけです。夕方というのは 6 時のことです。ですから 5 時から 6 時までしか、1 時間しか働かなかったのに一日分の給金一デナリを頂いたわけです。神様の目からは、時間の長さはあまり関係ない。私たちの頑張りはあまり関係ない。どこを神様が見ておられるのか。何を神様は大切にされるのか。1 時間でも忠実に働き、喜びと感謝をもって仕えるならば、働くならば、神様は想像を超えたような祝福を下されます。「雇ってもらったこと、それだけでもう嬉しいです。それでもう私は充分です。救って頂いたこと、それでもう充分です。拾ってもらえたこと、それで充分です。」報酬の額はどうしても良かったのです。

“5時から男”は「こんな私でも、私のことを雇ってくれた。有り難い主人だ。」と。それだけでこの人は働くことができました。それと最初に雇われた人との比較を是非皆さんに考えて頂きたいと思います。

今からこのたとえ話を細かく見ていきますけれども、その前に文脈というものも意識して頂きたいと思います。聖書は必ず文脈で理解しなければ、これは聖書から逸脱した身勝手な私的解釈になりかねません。特にたとえ話というのは注意が必要です。文脈から外してしまえば、たとえ話は如何様にも自分の都合の良いように理解してしまうものでありますので、文脈というのは**19章**からの流れでありまして**27～30節**を受けてイエスはこのたとえ話を弟子たちになされたということ。特に弟子たちの中のペテロに対してこの話をされました。**マタイ 19:27～30**、その前にはちょうど前回の礼拝で見た箇所があります。裕福な若い役人がイエスのもとに行って「先生、永遠の命を得るためにはどんな良い事をしたらいいのですか。」ということで、結局イエスはこの人に「あなたの持ち物を全部売り払って貧しい人に与えて、その上で私についてきなさい。そうすればあなたは永遠の命を得る。本物の命を得る。生きがいを得るんだ。」と言いました。でも、この人はその言葉を聞いた途端に顔を曇らせて、しょぼんとしてイエスのもとを去って行きました。なぜならば、この人にとっての神は、主は持ち物だったからです。持ち物に持たれた。所有物に所有されてしまっていたんです。彼にとっての神は、偶像は、お金、持ち物でありました。それを捨てなければ、確かに永遠の命を得ることは出来ません。そしてイエスを自分の神、自分の主と心で信じて、口で告白して受け入れなければ、勿論永遠の命はありません。その背景の中でペテロがここで口出しをしたわけです。**マタイ 19:27**から読みます。『<sup>27</sup>そのとき、ペテロはイエスに答えて言った。「ご覧ください。私たちは、何もかも捨てて、あなたに従ってまいりました。私たちは何がいただけるでしょうか。」<sup>28</sup>そこで、イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。世が改まって人の子がその栄光の座に着く時、わたしに従って来たあなたがたも十二の座に着いて、イスラエルの十二の部族をさばくのです。<sup>29</sup>また、わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子、あるいは畑を捨てた者はすべて、その幾倍もを受け、また永遠のいのちを受け継ぎます。<sup>30</sup>ただ、先の者があとになり、あとの者が先になることが多いのです。』という言葉を受けてイエスは**20章**のたとえ話をペテロの質問の答えとして、または補足を兼ねて話したわけです。「確かにあなた方はすべてを捨てて私に従って来た。間違いなくあなた方には報いがある。心配は要らないよ。あなた方にはしっかり報いを与えることは保証されている。ただし気をつけなさい。」という、その言わば警告・忠告の内容がこの**マタイの 20章**のたとえ話ということになります。このたとえを通してペテロに、そして私たちにイエス・キリストが言わんとしていることは、こういうことです。「私がどのように報いをあなた方に与えるのか。そして私はどのような者であるのか。このたとえ話を通して知りなさい。考えなさい。」イエス・キリストがどのように報いというものをお与えになるのか。そしてイエス・キリストがどのようなお方なのか。このぶどう園のたとえを通して学びなさい、ということでもあります。

このぶどう園というのは今から**2000**年前の古代のイスラエルの話ですので多少なり当時の背景を知る必要があります。当時の慣習、文化を知る必要があります。ぶどうの収穫はちょうど**8月**から**9月**にかけて、特に**9月**の半ばがピークであります。その後にイスラエルは雨季となります。雨季になるともうずっと雨が降りますので、ぶどうの実は傷んでしまいます。台無しになってしまうんです。ですから雨季が来る前に、大雨になる前に急いでぶどうの実を収穫しなければいけません。それが背景にあります。空模様を見ながら主人はとにかく集中的にぶどうを収穫するために日雇いの労働者たちを雇うわけです。もし人手が足りないようであれば、何度となく市場に行って労働者を雇用するわけです。それでもどうも作業が遅れ気味である、空模様が怪しい。そうやってきたらさらにまた市場に行って主人はもっと多くの労働者たちを雇い入れるわけです。**20章**のところにはまず**1節**に「朝早く」とありますが、これは朝の**6時**ということ。その朝の**6時**にまず一日一デナリという給金で契約をします。その契約というのは労働者の方から勿論持ち掛けるものです。労働者とこの雇用者の間で交渉するわけです。契約の取引をするわけです。「一日一デナリでどうですか。」主人は「分かった。お前たちを雇おう。」ということで、この**6時**に主人と自分たちの側から提案した額で取引をして、交渉して、そして自分たちは一デナリという金額を当然期待をしたわけです。「私たちにこういう必要があります。ですから神様、こういうものを下さい。」要求をするわけです。それが最初の者であります。

あとの者はその後朝の9時、昼の12時、午後の3時、そして最後の者は夕方5時に雇われるわけです。実は彼らは特別契約はしていません。取引も交渉もしていません。もう一度**4節5節**のところを見て下さい。『あなたがたも、ぶどう園に行きなさい。相当のものを上げるから。』“9時から男”には、**相当のものをあげるから**、だけです。**5節**の12時3時の者たちは、やはり『**同じようにした。**』とあります。相当のものをあげるから。金額は一切設定されていません。特別取引も交渉もこの雇い人たちとの間には交わされていません。支払いの約束は決まっていないのです。**7節**のところでは“**5時から男**”については、相当のものをあげると何とも書いてありません。ただ『**ぶどう園に行きなさい。**』だけです。給金をあげるから、とも言われていません。ただ雇うという約束だけです。お金を払うとは言っていません。その違いをまず押さえて頂きたいと思います。一デナリの契約をしたのは朝6時にマーケットに居たその最初の者だけです。それ以降の者たち、9時に雇い入れられた者、12時に雇い入れられた者、3時に雇い入れられた者、そして5時に雇い入れられた者は、何も主人との間ではお金の約束はしていません。彼らは主人に何の要求もしていません。「〇〇が必要だから、××払って下さい。それだけ働きますから。」とも言っていません。主人の方から、ただ相当のものをあげるから。“**5時から男**”においては何も約束はしていません。このことを是非自分に当てはめて頂きたいと思います。私たちはこの日雇い労働者たちであります。「私はこれが欲しいのです。あれが欲しいのです。だから〇〇をします。××をやります。毎週欠かさず教会に行きますから、これを下さい。毎日聖書を読みますから、お祈りしますから、だから私の仕事を祝福して下さい。教会で沢山奉仕をしますから、だから私に美しい伴侶を下さい。優しい彼女を下さい。彼氏を下さい。こうしますから、あぁしますから。今週は銀行強盗をやりませんから、是非私を祝福して下さい。」と、このように私たちは「これが必要だから。」そして「私は頑張りますから、あなたは私に当然これらを、私の要求するものを報いて下さい。」それが最初の者であります。でも、後の者たちはそのような約束は一切しておりません。最初の者はまさしく律法主義者であります。「こうするから、あぁするから。こうしないから、あぁしないから。だから私の要求を呑んで欲しい。当然報いて貰いたい。頑張りますから、犠牲を払いますから、だからこれを叶えて下さい。この必要を満たして下さい。」そのようなアプローチは律法主義者のものであります。

そして、もう一つ気付いて頂きたい点があります。これらの労務者たちは皆市場に居たということです。ハローワークみたいな、そこに居たわけです。仕事がなくてうろうろしていたわけです。この労務者は勿論私たちのことなのですが、彼は皆(注目して下さい。)市場に立っていたんです。彼らはどこにいたか。何度も言いますが、市場に立っていたんです。市場というのは主人に出会えるところ。そこは主人が居るところです。主人が出入りするところです。そこに労務者たちは居ました。彼らは家でゴロゴロしていたわけではありません。家でソファにひっくり返ってテレビを見ていたわけではありません。ゲームをしていたわけではありません。彼らは主人の居られるところ、主人が出入りされる場所に立っていました。そこで常にいつでも使ってもらえるように自分自身をそこに置いたわけです。アベイラブル“available”という言葉があります。使ってもらえるように。「何でも私は喜んでやりますから、声を掛けて下さい。準備万端整っています。」そこに身を置いたわけです。主人の居られるところ、私たちの主の居られるところとはどこでしょうか。

それは**マタイの福音書 18:20**に書かれている通りであります。『**ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。**』私たちの主はここにいます。今朝はイエス・キリストの名において私たちはここに集まりました。2人でも3人でも、充分条件を満たしています。ここにイエス・キリストが居られます。私たちは言わば市場に来たわけです。勿論イエス・キリストは教会にしか居ないわけではありません。どこにでも居られる方ですが、特にイエスの臨在というものを強く身近に実感出来るのが教会をいうところであり、ひとりで聖書を読んでいる時も勿論イエス・キリストの臨在を感じ取る事が出来るでしょう。また賛美をしている時もそうです。イスラエルの神は賛美を住まいとされる方です。いろいろなところで私たちは神様が居られるということを実感出来る場面がありますが、教会以上に神の臨在を実感出来る場所は他にはありません。ですから、ここで言う市場というのは、まさに主人の居られるところ、出入りするところということで、私たちにおいては教会というところであり、私たちはここで主を待っているわけです。主に声をかけられるのを待っているのです。「いつでも声を掛けてもらって構いません

ん。準備万端整っています。」家でごろごろしているのではありません。今日は調子が悪いから寝ていようとか、今日はそういう気分ではないから、働く気分ではないから、奉仕する気分ではないから。でも、ここで教えられることは、最低条件として私たちは市場に行く必要があります。もしそこにあなたが身を置くならば、神様という方は、私たちの主人は、あなたの想像を絶するような大きな祝福をもたらして下さいます。

今から耳の穴をカッポジってよく聞いて頂きたいことがあります。ゆっくり言いますからしっかり聞いて下さい。神様は常にご自分に選択の余地を与える者に最善を与えられるということ。神様は常にご自分に選択の余地を残す者に最善を与えられるということ。また別の言い方をすれば、神様は常にご自分にチョイスを任せる者にベストを与えるということ。掴んで頂いたでしょうか。このことを、是非このストーリーを通して見て頂きたいと思います。私たちの主人は、神様は、ご自分に選択の余地を残す者に最善を与えて下さいます。信じて下さい。ご自分にチョイスを任せる者にベストを与えて下さいます。信じて下さい。イエス・キリストはこのストーリーを通して、このたとえを通して、「わたしはどんなに恵み深い者なのか、憐れみ深い者なのか。」教えて下さいます。神様があなたに最善のものを、最高のものを、最大のもの、ベストを与えてくださるということを信頼して欲しいと思います。ですから神様はご自分に信頼する者に対してもベストを、最善を与えて下さいます。エペソ3:20にこう書いてあります。パウロの祈りの1節であります。『どうか、私たちのうちに働く力によって、私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて豊かに施すことのできる方に。』私たちの神とは、私たちの主人とは、恵みの神です。私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて豊かに施すことができる方です。できない方ではなくて、できる方です。常にご自分に選択の余地を残す者に対しては想像を絶するような驚くべき祝福を与えて下さるお方です。これが私たちの神です。1時間しか働いていないのに、“5時から男”に一番の祝福を与えておられます。1時間しか働いていない最低の人に対して最高のものを与えています。これが神の恵みというものです。ローマ4:5にも神の恵みについて書かれている箇所があります。『何の働きもない者が、不敬虔な者を義と認めてくださる方を信じるなら、その信仰が義とみなされるのです。』これが恵みです。何の働きもない者が、義と認められる。これが恵みです。全く相応しくない者が、当然受けるべきでない者が、最高のものを受けるわけです。何の功績もありません。1時間しか働いていないです。でも、その者に最高のものが与えられる。あり得ないけれども、有り難い。それが、私たちの神様のなさることです。これが私たちの神であります。これが驚くべき恵み、アメージング・グレースというものです。“5時から男”に対してこの恵みを与えてくださった神は、私たちにベストを与えて下さいます。神はご自分にタイミングを任せる者にベストを与えて下さいます。神様はご自分にタイミングを任せる者にベストを与えて下さいます。

そしてもう1カ所、私たちの神をよく知る事の出来る箇所、よく知っている箇所だと思いますが、ルカの福音書15章の中から皆さんにお伝えしたいと思います。特に11~32節のところ。これもたとえ話です。あの有名な放蕩息子のたとえ話です。ですから開かなくても皆さんよく知っているので聞いて頂ければそれで結構です。ただ馴染みのない方のために敢えて読ませて頂きます。神の恵みについて学んで欲しいと思います。『<sup>11</sup>またこう話された。「ある人に息子がふたりあった。<sup>12</sup>弟が父に、『おとうさん。私に財産の分け前を下さい。』と言った。それで父は、身代をふたりに分けてやった。(本来は、父親の身代は父親が死んでから子供たちに分配されるものですから、弟が言っているのは「親父、早く死ね。早く死んでくれ。」と言っているわけです。)<sup>13</sup>それから、幾日もたたぬうちに、弟は、何もかもまとめて遠い国に旅立った。そして、そこで放蕩して湯水のように財産を使ってしまった。<sup>14</sup>何もかも使い果たしたあとで、その国に大ききんが起り、彼は食べるにも困り始めた。<sup>15</sup>それで、その国のある人のもとに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって、豚の世話をさせた。<sup>16</sup>彼は豚の食べるいなご豆で腹を満たしたいほどであったが、だれひとり彼に与えようとはしなかった。(当時豚を飼うというのは、もう完全に落ちぶれてしまった、完全に身を落とした最低の最も卑しい仕事というふうに見なされていたものです。でも、この人はあまりのひもじさに豚の餌を食べる、もうそれしか食い繋ぐことは出来ないというところまで貶められたわけです。)<sup>17</sup>しかし(これが素晴らしいです。聖書の中に“しかし”という言葉が出てきたら是非注目して下さい。)、我に返ったとき彼は、こう言った。『父のところには、パンのあり余っている雇い人が大ぜいいるではないか。それなのに、私はここで、飢え死にしそうだ。<sup>18</sup>立っ

て、父のところに行って、こう言おう。「おとうさん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。<sup>19</sup>もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。雇い人のひとりにしてください。」(これもやはり雇い人の物語なのです。)<sup>20</sup>こうして彼は立ち上がって、自分の父のもとに行った。ところが、まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけ、かわいそうに思い、走り寄って彼を抱き、口づけした。<sup>21</sup>息子は言った。『おとうさん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。(雇い人のひとりにしてくださいという前に、父はストップしました。)]<sup>22</sup>ところが父親は、しもべたちに言った。『急いで一番良い着物を持って来て、この子に着せなさい。それから、手に指輪をはめさせ、足にくつをはかせなさい。(一番良い着物を着せて、そして手に指輪をはめさせたとありますが、指輪というのは当時のクレジットカードのようなものです。指輪があればそれで商品の取引が出来ます。くつをはかせたというのは、当時は奴隷はくつは履けなかったのです。)<sup>23</sup>そして肥えた子牛を引いて来てほふりなさい。食べて祝おうではないか。(息子が帰ってきた。パーティーだと、お祝いだと。)<sup>24</sup>この息子は、死んでいたのが生き返り、いなくなっていたのが見つかったのだから。』そして彼らは祝宴を始めた。(その後に注目して下さい。)<sup>25</sup>ところで、兄息子は畑にいたが、帰って来て家に近づくと、音楽や踊りの音が聞こえて来た。それで、<sup>26</sup>しもべのひとりを呼んで、これはいったい何事かと尋ねると、<sup>27</sup>しもべは言った。『弟さんがお帰りになったのです。無事な姿をお迎えしたというので、おとうさんが、肥えた子牛をほふらせなされたのです。』<sup>28</sup>すると、兄はおこって、家にはいろいろともしなかつた。それで、父が出て来て、いろいろなだめてみた。<sup>29</sup>しかし兄は父にこう言った。『ご覧なさい。長年の間、私はおとうさんに仕え、戒めを破ったことは一度もありません。その私には、友だちと楽しめと言って、子山羊一匹下さったことはありません。<sup>30</sup>それなのに、遊女におぼれてあなたの身代を食いつぶして帰って来たこのあなたの息子のためには、肥えた子牛をほふらせなされたのですか。』<sup>31</sup>父は彼に言った。『子よ。おまえはいつも私といっしょにいる。私のものは、全部おまえのものだ。<sup>32</sup>だがおまえの弟は、死んでいたのが生き返って来たのだ。いなくなっていたのが見つかったのだから、楽しんで喜ぶのは当然ではないか。』この父とは、私たちの父なる神のことです。父の当然と、私たちの当然は全然違います。ただ皆さんの中には、この兄息子の気持ちがよく分かると、とんでもない奴だと、なんでこんな奴のためにと、そう思っているならばあなたはこの兄と同じ律法主義者であります。マタイの福音書の 20 章の最初に雇われ者たちと全く同じであります。とにかくむかついたわけです。腹が立ったわけです。そして父に対して文句をつけました。不平不満を漏らしました。「こんなにやりたい放題やってきた放蕩息子のこの弟に、こんなとんでもない奴にあなたは祝宴を、パーティーを開くなんて、どうかしています。」でもここで父が兄息子に言っているのは、こういうことです。「あなたはあまりにも忙しく働き過ぎてきた。あなたは一生懸命頑張ることで私に自分を認めさせようと、私を感心させようと自分の頑張りでとにかくがむしゃらに働いてきた。または自分の力を、価値観を証明しようとしてあなたは一生懸命働いてきた。でもそれは奴隷根性に過ぎない。もしあなたがそんなふうに自分を認めさせるために、感心させるために、感謝されるために働いて、私をとにかく感心させようとそんなに躍起になっていなければ、あなたには全てがあったのだから、いつでもそんな愚かな空しい働きはストップして、やめて、いつでもあなたは毎日のようにパーティーを開くことができたはずではないか。いつでも楽しみ、喜ぶことが出来たではないか。なのに、あなたはそれをしなかつた。ただがむしゃらに一生懸命働いて、楽しむことも喜ぶこともせず、自分が如何に出来るか、そして如何に私を感心させようと、認めさせようと躍起になってきたのか。あなたはそんなふうに忙しく働いて、そして結局のところはすべての楽しみ・喜びをあなた自身が無駄にしてきた、潰してきたではないか。」と、それが父の言わんとしていることであります。「いつでもあなたは楽しむことができたはず。そんなふうに自分を証明しようとして働くのをやめさえすれば、あなたはいつでも楽しめたはずである。エンジョイできたはずだ。」そのことをここで私たちにも当てはめたいと思います。皆さんはどうでしょうか。神様に認めてもらおう。神様に感心してもらおう。褒めてもらおう。人から感謝されよう。自分自身を証明しようとしていないでしょうか。自分は如何に出来る人間なのか。如何に素晴らしいクリスチャンなのか。でも、もし兄息子のようにあなたがそのように働くならば、それはまさに奴隷根性剥き出しでありますので、神様が恵みを注いでいる者を見ると無性に腹が立つわけです。我慢ならないわけです。常に弟と比べるからです。兄息

子は常に弟と比べて、頑張るって頑張るって自分は弟よりもマシだ。そのことを証明しようと躍起になってきたわけです。忙しすぎて神様の恵みをエンジョイ出来なかったのです。楽しむことが出来なかったのです。皮肉なことであります。「私はこんなに頑張っているのに。どうしてあんな奴が。何もしていないじゃないか。なのに、なんであいつはあんなに良い目に遭っているのか。あんなに喜び楽しんでいるのか。許せない。」不平不満を、文句をたれて、そして私たちも結果的には神様の恵みをエンジョイできないような自分に成り下がってしまっている。

そして、ルツ記も皆さんよく知っているストーリーなので、あとで読んで頂きたいと思いますが、ルツ記 2 章のところにモアブ人の(外国人です。イスラエルからすると外国人である)ルツという女性が、やはり働いています。畑で働いています。彼女は貧しいやもめで、外国人で、生活の術がありませんでしたが、イスラエルの律法では福祉システムがありまして、落穂拾いという規定がありました。法律がありました。「すべての人は畑を隅々まで刈ってはならない。必ず畑の隅を、コーナーを残して、それを貧しい者に刈らせるように。また収穫作業の時に落ちた穂は決して拾ってはならない。それは貧しい者に取らせるように。」という福祉システムであります。それを利用して、適用して貧しいやもめであった、外国人のモアブ人の女性ルツという人は、一生懸命落穂拾いをしました。その落穂拾いをした畑は、ボアズという人の畑でありました。ボアズという人は非常に裕福な男性で、そして人格者で成熟した信仰者でもありました。そのボアズの目にルツの姿が留まったわけです。そしてボアズは雇い人たちの収穫する者たちに指示しました。「ルツの前にはわざと穂を落とすように。」そしてルツはそれを拾いました。家で待つ年老いた姑のナオミのところにも大量に持ち帰ったその穂を見せたわけですが、ナオミもそれにはびっくりしました。落穂拾いをするならば、そんなに沢山のものを受け取れるはずがない。びっくりしたわけです。でも、ボアズは彼女のためにわざと意図的に落ち穂を残したわけです。穂を取って目の前に残したわけです。その“わざと意図的に”というところの目的については、ボアズはとにかくこのモアブ人ルツのことを愛していました。モアブ人というだけでイスラエルでは忌み嫌われていたような外国人です。モアブ人の女性は誰にも相手にされない。でも、そんな者をボアズは愛してわざと穂を置きました。同時にもう一つの意図として、ボアズは、私は実に恵み深い寛大な者であるということを、雇い人たちに証明するためにもこのことを意図しました。ですから、ボアズの意図というのは、目的というのは、誰からも相手にされない、誰も関わりたくないというモアブ人の女性ルツに対する愛を証明するというと同時に、ボアズというこの男は実に寛大な者である、実に恵み深い者で、それを証明するために取ってわざと穂を残したわけです。落としたわけです。これはルツの頑張りではないです。ルツが勤勉で姑のナオミ思いだったからというわけではないです。それがボアズの意図ではなかったのです。ボアズの意図は単純に、無条件でモアブ人の女性ルツを愛しているということ。単純に、自分が如何に寛大で寛容で恵み豊かな者であるのかということ周囲に知らしめるため。その意図がありました。

そして今度はエペソ 1:2 を開いて下さい。『私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたの上にありますように。』今読んだところはまさにマタイの福音書 20 章の目的であります。恵みという言葉があります。恵みという言葉は、皆さんに配られている週報にもその言葉の意味について説明したものがああります。ですから、また後でじっくり読んで頂きたいと思いますが、英語では恵みは、「グレイス」"grace"と言います。マラナサ・グレース・フェロシップのこの教会の名前にも使われているものです。この「グレイス」という言葉は、英語で"grace"と綴るわけですが、それぞれのアルファベットを折句にすると、皆さんの週報にあるような言葉になります。それをアクロニウムというふうにも言います。頭文字を綴り合わせて折句にすると、"g"は"god's"、"r"は"riches"、"a"は"at"、"c"は"Christ"、"e"は"expense" god's riches at Christ expense.直訳すると、そこに書かれているように「神の富、キリストの出費における。」または「キリストの犠牲、損失における。」これを文章らしくすると、恵みというものは、キリストが命の代価をもって支払った神の富であるということです。これが恵みというものだというふうにも定義出来ます。恵みは、行いの正反対であります。私の信心深さ、私の敬虔さ、私の頑張り・努力、熱心さ、犠牲、献身。それらは恵みとは正反対のものです。その後も 3~6 節を読んでいただくと、恵みについて学ぶことが出来ます。『私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神はキリストにあって、天にあるすべての霊的祝福をもつ

て私たちに祝福してくださいました。<sup>4</sup>すなわち、神は私たちが世界の基の置かれる前から彼にあって選び、御前で聖く、傷のない者にしようと考えられました。<sup>5</sup>神は、みむねとみこころのままに、私たちにイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられました。<sup>6</sup>それは、神がその愛する方によって私たちに与えてくださった恵みの栄光が、ほめたたえられるためです。』恵みの栄光が、ほめたたえられるためだとあります。神の恵みがほめたたえられるためです。天使たちは私たちの信心深さに特別驚きません。感心しません。天使たちは私たちの努力、奉仕、そうした行いには一切感心しません。天使たちはただ単純に、神様はどうして人間のような者たちを、あんなに不完全な脆い罪深い者たちを、こんなにも愛され、こんなにも良くして下さるのか。彼らの罪を赦し、ひとり子さえも惜しまずに与える。それがあり得ないこと。天使たちはその神の恵みにただただ驚き、圧倒され、ほめたたえるわけです。ここで「世界の基の置かれる前から」という言葉にも注目して下さい。これは天地創造前からということです。私たちは天地創造前から神様に愛されていたということです。勿論あなたが生まれる遙か昔のことです。生まれる前から愛され、そして霊的な祝福がもう与えられるという約束があります。生まれる前から愛され、生まれる前から霊的な祝福が注がれる。あり得ないことです。生まれる前からということは勿論あなたは何もしていないわけです。何もやっていないのに、何も頑張っていないのに、神様は一方的に祝福を注いで下さいます。ありとあらゆる霊的祝福です。これが恵みであります。この恵みが分かるとあなたには平安がやってきます。平安がないのはなぜでしょうか。あなたは恵みを理解していないからです。恵みと平安、順序が大事です。**2節**のところで『**私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたの上にありますように。**』平安と恵みではありません。先に恵みが来るのです。恵みが分からなければ、いつまでたっても平安は来ません。行いによるものではありません。恵みによるのです。「聖書を毎日欠かさず 10 章読む。毎日 3 時間祈る。MGF の集会のすべてに参加し、MGF でなされる奉仕のすべてに関わり、そして 10 分の 5 献金します。だから私を祝福して下さい。」それは恵みではありません。それは行いであります。恵みというものは、当然受けるべきでないものを受けます。一方、行いは、当然受けるべきものを受けます。「一日働いたから一デナリ。当然です。」それが行いであります。恵みは「5 時からしか働いていません。1 時間しか働いていませんから、私には一デナリもらう資格はありません。」当然一デナリは受けるべきではないのです。でも、それを頂けてしまう。当然受けるべきでないものを頂ける。これが恵みであります。または恵みは、分不相応な者に与えられる過分な親切というふうにも定義されます。行いは、当然受けるべきものを受けますから、それは単純に報酬だと言えます。ただの報酬です。恵みは、報酬以上のものです。神様はあなたの想像を絶するようなものを用意しておられます。是非神の恵みにすがって下さい。

ヘブル 4:16 に「その恵みにすがるように」という勧めがあります。『**ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。**』大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか、とあります。行いの御座ではないことに私は感謝します。恵みの御座に近くように、アプローチするよう。行いの御座に近づくというのは、最初の労働者です。「私には一デナリ必要なんです。今月このローンの支払いがあるんです。将来の老後のために。頑張りますから、祝福して下さい。仕事を与えて下さい。私はこの大学に行きたいんです。進学させて下さい、頑張りますから。」それは行いの御座に近づくということです。勿論そのように頑張ればあなたは自分が要求したもの、希望したものを手にすることが出来ると思います。「一日一デナリ、これが必要だから頑張ります。朝から晩まで働きます。」望んだものは得られるでしょう。それがあなたの報酬です。それがあなたの努力の賜物です。ハッピーですか。恵みを受けている者を見る時、あなたは穏やかにはなれません。「フェアじゃない。どうしてあんな奴が。あんなに酷いことをして、あんなに怠惰で、無力で、落ちぶれたあいつがなぜこの私以上に、この俺よりも良い生活をしているのか。あり得ない。」妬みがそこに生じないでしょうか。神の恵みの御座に近づいて欲しいと思います。そうすればあなたには平安が訪れます。人と比較する必要はもうないのです。頑張らなければいけないというメンタリティーからも解放されます。すごいプレッシャーから、重荷からあなたは解放されます。そして、頑張らなければ失うかもしれないという恐れからも解放されます。人と比較しなくてもいい素晴らしい人生です。でも、そんな恵みのことをあまり言うと、「クリスチャンたちは何もなくなるじゃないで

すか。怠慢になるのではないですか。」その正反対です。まったく真逆です。神の恵みを知れば知るほどあなたは今まで以上に頑張ります。律法主義者たちよりも遥かに多くのことを行います。恵みを知ったら何もしなくなるなんて言うのは、まさしく恵みを知らない者です。なぜならば恵みを知ってしまえば、あなたはあまりにも感動して「こんな私のために神様はひとり子イエス・キリストを与えて下さった。むしろ私はもうこの方と一生お付き合いしたい。一生この方に付き合いたい。仕えたい。この方の言われることを何でも聞きたい。毎日朝から晩まででも聖書を読みたい。あなたの言葉をいつでも聞いていたいのです。恵みをいつでも受けたいのです。」神様をもっと愛するようになります。心を尽くして、思いを尽くして、力を尽くして、神を愛するようになります。恵みを知れば知るほど、もっともっと、増々この方に仕えたくくなります。感謝が溢れます。その逆に、不平不満はなくなります。これまでは、妬み、怒り、恨み、そのようなものばかりで心が満ちていたかもしれませんが、恵みに触れてしまうとそれらがすべて吹っ飛んでしまいます。神様にチョイスを任せるならば、あなたは必ずベストを受けられます。この方に選択の余地を残すならば、あなたは絶対に最善を受けることになります。

そして是非このことを皆さんも吟味して頂きたいので、今日または昨晚、最近と言っておきたいと思いますが、あなたが口にしたことを思い出して下さい。今朝でもいいです。昨日の晩でもいいです。昨日のことでも、先週のことでも、あなたがよく口にしたこと、何を言ったのか、今思い出して頂きたいと思います。あなたの口からは文句が出てきたでしょうか。不平不満が出てきたでしょうか。恐れや不安、不信仰、または妬みや皮肉や絶望感、落胆の言葉、嫌み、怒り、そうしたことがあなたの口から沢山出て来たでしょうか。最初の労働者も文句を言いました。「一日中労苦と焼けるような暑さを辛抱したのです。」あなたの口からは、どんな言葉が出て来たでしょうか。イエスはこう言われました。

マタイの福音書 15:18~19 に『<sup>18</sup>しかし、口から出るものは、心から出て来ます。それは人を汚します。<sup>19</sup>悪い考え、殺人、姦淫、不品行、盗み、偽証、ののしりは心から出て来るからです。』あなたが今朝口にしたこと、昨日の夜口にしたこと、先週口にしたことは、皆あなたの心から出てきたのです。「いや、違います。心にもないことを言ってしまったのです。つい口が滑って。」そうではありません。イエスはあなたのことを見抜いています。それがまさにあなたの心にあるのです。抑えられないだけです。意識しようと、無意識であろうと、それがあなたの心を表しています。それともあなたの口からは、それとはまったく違って真逆で、喜びの言葉、賛美の言葉、感謝の言葉、そして希望や平安、愛で満ち溢れるような言葉、それらが口から溢れ出て来たのであれば、それがあなたの心を表しています。「明日はどうなるか分からない、将来はどうなるか分からない。でも、私は神様を信頼します。私の神は恵みの神です。この方は栄光の富を持って私のすべての必要を満たして下さい。どのような手段で私の必要を満たして下さるのか分かりません。でも私は信頼します。だから心配しません。だから文句も言いません。だから恐れません。この方は決して私を裏切りません。彼を信じる者は決して失望させられないと聖書に書いてあるからです。がっかりさせられないのです。落胆させられないのです。この方を信頼します。」と、それが最後の“**5時から男**”でありました。「ぶどう園へ行って働きなさい。」報酬の約束は1つも無かったのです。でもこの“**5時から男**”は信頼したのです。最短時間しか働いていないのですが、勿論報酬なんかもらえるはずもない。常識で考えればそうです。人間的にはそうです。あり得ないことです。「私は相応しくない。こんな者は何も得られない。何の働きもないから。」でも、神様に選択の余地を残す者は必ず最善を頂けるということを、“**5時から男**”は信じました。「この主人はきっと私によくして下さい。」

そして最後になりますけれども、テトス 3:3~7 をお聞き頂きたいと思います。『<sup>3</sup> 私たちも以前は、愚かな者であり、不従順で、迷った者であり、いろいろな欲情と快樂の奴隷になり、悪意とねたみの中に生活し、憎まれ者であり、互いに憎み合う者でした。<sup>4</sup>しかし、私たちの救い主なる神のいつくしみと人への愛とが現われたとき、<sup>5</sup>神は、私たちが行なった義のわざによってではなく(行いによってではなく)、ご自分のあわれみのゆえに、聖霊による、新生と更新との洗いをもって私たちを救って下さいました。<sup>6</sup>神は、この聖霊を、私たちの救い主なるイエス・キリストによって、私たちに豊かに注いで下さったのです。<sup>7</sup>それは、私たちがキリストの恵みによって義と認められ、永遠のいの

ちの望みによって、相続人となるためです。』救いは義のわざ、私たちの行いによるものではありません。恵みによるものだとして書いてあります。私たちは自分のことを“**5時から男**”だという認識があるでしょうか。何もないんだと。「私には何の能力もない。貧しい者です。無力な者です。相応しくない者です。罪汚れた者です。神様なしでは生きていけない者です。」そのような自覚があるでしょうか。そのように自認しているでしょうか。

律法主義者は違います。「私は出来る。朝から晩まで頑張って働けば、それ相当のものを手に入れることが出来るんだ。」でもその人たちは常に人と比較しています。人と比較しては、文句ばかりたれていきます。不平不満ばかり口から出て出てきます。妬みや苦々しさ、恨みや辛みで心はいっぱいであります。常にそういう人は機嫌が悪いです。皆さんの中で機嫌が悪い人がいたら、その人は皆律法主義者です。平安がないんです。恵みが分からないのです。

是非最後になりましたけれども、この中にも若者が多いので、若者にも最後お伝えしたいことがあります。将来先行きは不安定です。不透明です。これから何が分かるか分かりません。経済危機もありましたが、今は大震災によってもこれから日本はどうなっていくのか。そのことを思うと自分の進路についても迷うこともあるかもしれません。どういことを自分はしていったらいいのか。どういう取り組みをしていったらいいのか。どんな仕事に就いたらいいのか。どういう方向に進んでいったらいいのか。そういう時、是非市場に行ってみて下さい。主のおられるところに行って、そこでただ声が掛かるのを待って欲しいと思います。市場に行かずに家でゴロツとして、昼寝でもして、テレビでも、ゲームでもしている。それでは埒があきません。是非市場に行ってください。ただ、最初の者にはならないで下さい。自分で「これが必要ですから。これが手に入れたいですから。あなたと契約します。その分頑張りますから。あれもやります。これもやります。これはやりません。あれはやりません。ここは自制して禁欲しますから。悪いことはしませんから。むしろ良いことをしますから。教会で貢献しますから。だから私の夢を叶えて下さい。私の将来に道備えをして下さい。仕事を与えて下さい。お金を下さい。結婚相手を下さい。」もし、あなたが神様とそのような取引を交渉するならば、あなたは絶対に平安が持てません。必ずと言って良いほど兄息子のようにになります。ぶどう園の最初の労務者のようになります。でも、是非恵みの神を信じて下さい。相応しい時に、神のタイミングの時に、あなたは間違いなく神様から声を掛けられます。そして声を掛けられたら、迷わずその方の召しに従ってください。あなたの想像を絶するような祝福が待っています。絶対に取引しないで下さい。「これが手に入れば、私はこうします。」ではなくて、「何でもいいです。あなたにお任せします。チョイスはあなた次第で、お任せします。選択の余地をあなたに残しますから、どうぞご自由に。タイミングもあなたにお任せしますから、どうぞご自由に。私は期待します。信頼します。あなたが私にベストを、最善のものを下さるということ。」ですから是非そのことを信じて欲しいと思います。信じられなくなったら、**マタイの福音書 20 章**のこのたとえを読んでみて下さい。保証しますから。私も“**5時から男**”でした。保証します。必ず神様はあなたを祝福します。むしろ神様はあなたを祝福したくて、祝福したくて仕方がないお方です。理由は要りません。ありのままで結構です。モアブ人の女なら女のままで結構です。ありのままで結構です。“**5時から男**”でも何でもいいです。「私には何もできない。何もない。」それでいいんです。ただ、主のおられるところに常に身を置いて下さい。先がどうなるか分からなくても。もしかしたら雇ってもらえないかもしれない。でもずっと信頼して待って下さい。必ず声が掛かりますから。そしてよく日本語でも言うように、「残り物にはなんとやら。」とありますけれども、是非待って下さい。待って下さい。待って下さい。最低の人に、1時間しか働かない人に神様は最高のものを与えました。“**5時から男**”は信じたんです。家に帰らなかったのです。自分で他のところに行って、探し回らなかったのです。主を信頼したんです。そのことを特に若い人たちに伝えたいと思います。主の声が掛かることを待つということは、決して無駄なことではありません。空費ではありません。浪費でもありませんので、是非信じて下さい。最高の仕事があなたには与えられます。最高の祝福が。たぶん夢にも思っていないような想像を絶するものがあなたに用意されています。そのことを信じたいと思います。今から共に祈りたいと思います。